

和東町史編さん事業

資料調査報告書

第4号



相楽東部広域連合教育委員会

令和6年3月

目 次

ごあいさつ	1
1 湯谷ノ原古墳、福塚古墳における物理探査の実施とその意義	2～5
2 和東の歴史講座5 概要 上杉和央 「和東の景観史」	6～7
3 和東の歴史講座6 概要 本庄総子 「和東の古代」	8～9
4 チーム「炊いたん」の活動報告	10～11
5 あそび塾ウォークラリー報告	12～13
6 町史編さん室史料紹介 幻の鉄道計画	14～15
7 町史編さん室から	16

表紙写真 チーム「炊いたん」水無月団子調理風景（2023年7月18日撮影）

*過去の『資料調査報告書』は、和東町史編さん室のホームページからダウンロードできます。
(<https://www.union.sourakutoubu.lg.jp>)

ごあいさつ

和東町民の皆様をはじめ、町史関係者の皆様には、和東町史編さん事業の推進に、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

町史の編さんは、地域社会における「人づくり」の一環であり、ふるさと教育の充実につながります。この事業が、町おこしとなり、町の活性化につながるものと、期待が高まるところです。

町史編さん事業は、本年度で6年目を迎え、新たに食文化と祭礼行事に関する調査を開始しました。食文化調査は、小林啓治編集委員長の指導を受けながら、和東の特色ある伝統料理を、次世代に受け継いでいくことを目的としております。町史編さん協力員による調理の実践を楽しく進めております。また、祭礼調査は、各区に残る行事を調査し、現在の姿を記録し残しておこうとするものです。

和東町史編さん室では、本年度も、引き続いて文化財等の現地調査、歴史資料の収集と調査整理・保管に努めるとともに、講演会・古文書講座等を開催しました。広報『れんけい』への「編さん室だより」の掲載、ホームページの更新など、事業の成果を広くお知らせすることにも積極的に取り組んでまいりました。

さて、令和元年度から刊行を始めた『資料調査報告書』は、本号で第4号となります。本号では、京都府立大学による古墳の磁気探査の成果報告や、食文化調査の経過報告などを掲載しました。町史編さん事業の一端を知っていただければ、幸いです。

この間、調査にご協力いただきました各区長様をはじめ、ご所蔵の資料を提供いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。引き続きまして、より一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。第4号発刊に当たりましてのごあいさつとさせていただきます。

令和6年（2024年）3月

和東町史編さん委員会

委員長 岡田善行

1 湯谷ノ原古墳、福塚古墳における物理探査の実施とその意義

茶畑景観で全国的に有名な和東町は、昨年ご紹介した太鼓山古墳（伝安積親王墓）以外にもたくさんの古墳がある「古墳のまち」でもあります（図1）。墳丘が失われてしまったものも含めて10基余りの古墳の存在が知られていますが、学術的な発掘調査が行われたものはほとんどなく、それらの実態についてはよくわかっていません。そこで今回の和東町史編さん事業では、墳丘、埋葬施設の測量調査や過去の出土品の悉皆調査などをおこない、町内の古墳の実態解明に努めてきました。今回、ご紹介します湯谷ノ原古墳と福塚古墳についても2021年と2019年にそれぞれ墳丘の測量調査を実施しましたが、前者は遺物を採集することができず、埋葬施設の痕跡も確認できなかったため、古墳であるかどうかの決定的な手がかりが得られませんでした（京都府立大学文学部考古学研究室2023）。後者については削平された墳丘断面に石室が露出しており、埴輪や葺石も確認されたことから6世紀前半の古墳であることは確実となりましたが（鈴木ほか2021）、墳形については大きく削平を受けているため円墳、方墳二つの可能性が残されました（京都府立大学文学部考古学研究室2020）。そこで京都府立大学文学部考古学研究室では、山の辺遺跡調査会（天理大学文学部歴史文化学科考古学・民俗学研究室内、代表：桑原久男天理大学教授）の協力を得て、2022年の年末にこれらの古墳について物理探査を実施しました。

物理探査とは「地下に存在する物質の物理的、化学的性質について人為的または自然的

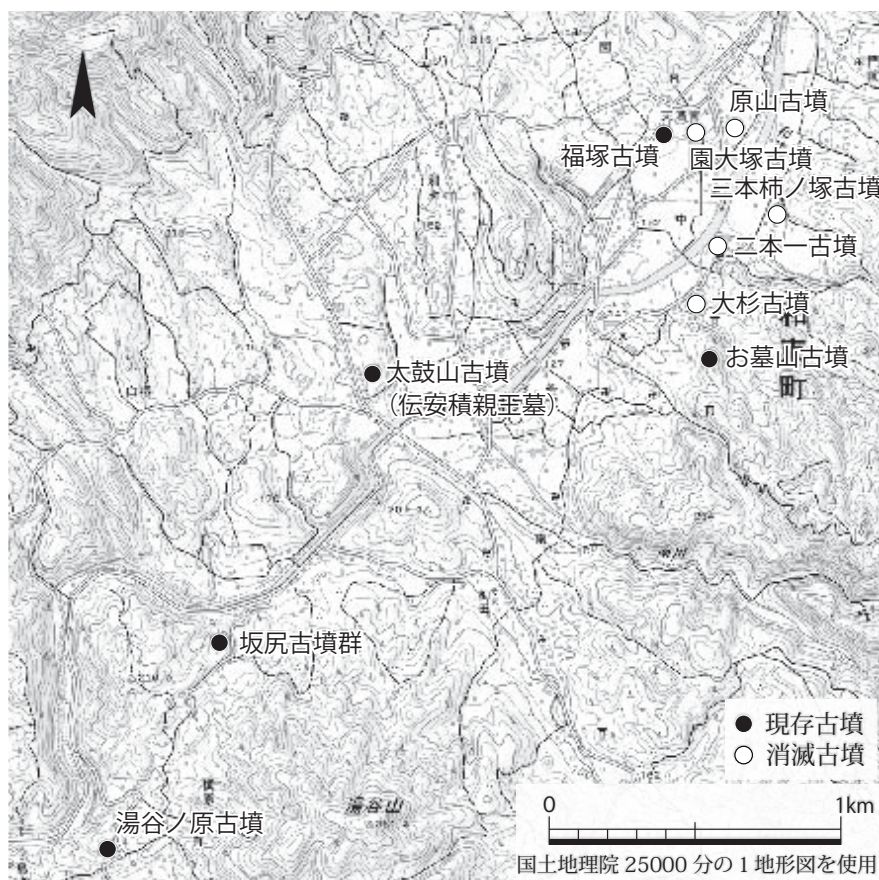


図1 和東町の古墳

に生じた現象を遠隔的に観測し、その資料を解析することにより、地下の状態や状況を解明する技術」（物理探査学会2005、208頁）で、埋葬施設や周溝の位置など、地表面ではわからない内部の構造を非破壊で調べる方法として、古墳など埋蔵文化財の調査でも広く用いられています。今回の調査では、電波を地中に照射し、地中からの反射波の強度や波形を測定する地中レーダ探査と、地表に設置した一对の電極から地下に電流を流し、別の一对の電極で電位差を測定して地中の比抵抗を計算する電気比



写真1 湯谷ノ原古墳の調査風景



写真2 福塚古墳の調査風景

抵抗探査をおこないました。地中レーダ探査の結果は、一定の深度幅での反射強度を平面的に表わすタイムスライス図を作成し、地下の構造物が捉えられるようにしています（図2・3）。

このように書くと小難しく感じるかもしれませんが、実際に現地で行うのは前者の場合、任意で設定した探査区内に測線を等間隔に設定し、そのライン上を約25kgのアンテナをソリに載せて行ったり来たりする重労働で、後者の場合も測線に沿って等間隔に電極を配置し、また次の測線に移動するという地道な作業の繰り返しです（写真1・2）。

地中レーダ探査の結果、湯谷ノ原古墳では墳丘上において、推定深度1.2～1.5mで長さ約4m、幅約1mの異常応答箇所が認められました（図2）。電気比抵抗探査でも同地点で異常が捉えられており、物性の異なる領域が存在すると考えられます。これが埋葬施設かどうかは現時点では即断できませんが、仮に埋葬施設だとすると、地中レーダ探査での反射強度が弱いため石室とは考え難く、木棺直葬や粘土槨の可能性が考えられそうです。

次に福塚古墳の地中レーダ探査の結果をみると、墳丘南側において、推定深度約0.9～1.2mで墳丘の南端に沿うように異常応答が集中して表れています（図3）。この異常は削平された墳丘の残り、もしくは転落した葺石の集中を示している可能性があり、その境界が東西にほぼ直線状に延びていることから、仮にこれが墳丘残存部分を捉えたものであるとすれば、方墳の可能性が示唆されます。また墳頂部での探査結果をみると、北東－南西方向に異常が伸びており、この異常は現状で露出している石室とよく対応しています。現在、露出している石室の位置が、現況の墳頂平坦面の範囲内で南東方向に偏っているため、さらに別の埋葬施設が存在する可能性も想定されましたが、探査の結果をみる限り、埋葬施設は一つと考えてよさそうです。

測量調査を実施した2基の古墳に対して、少しでも古墳の実態を明らかにできるよう、物理探査をおこないました。その結果、現況から円墳の可能性が高いと推測してきた福塚古墳の墳丘については、方墳である可能性が高くなってきました。また崖面で観察されていた石室が唯一の埋葬施設であるらしいことも推測できました。湯谷ノ原古墳についても、測量調査の際に遺物などがまったく採集されず、古墳としてよいかどうか疑問がもたれて

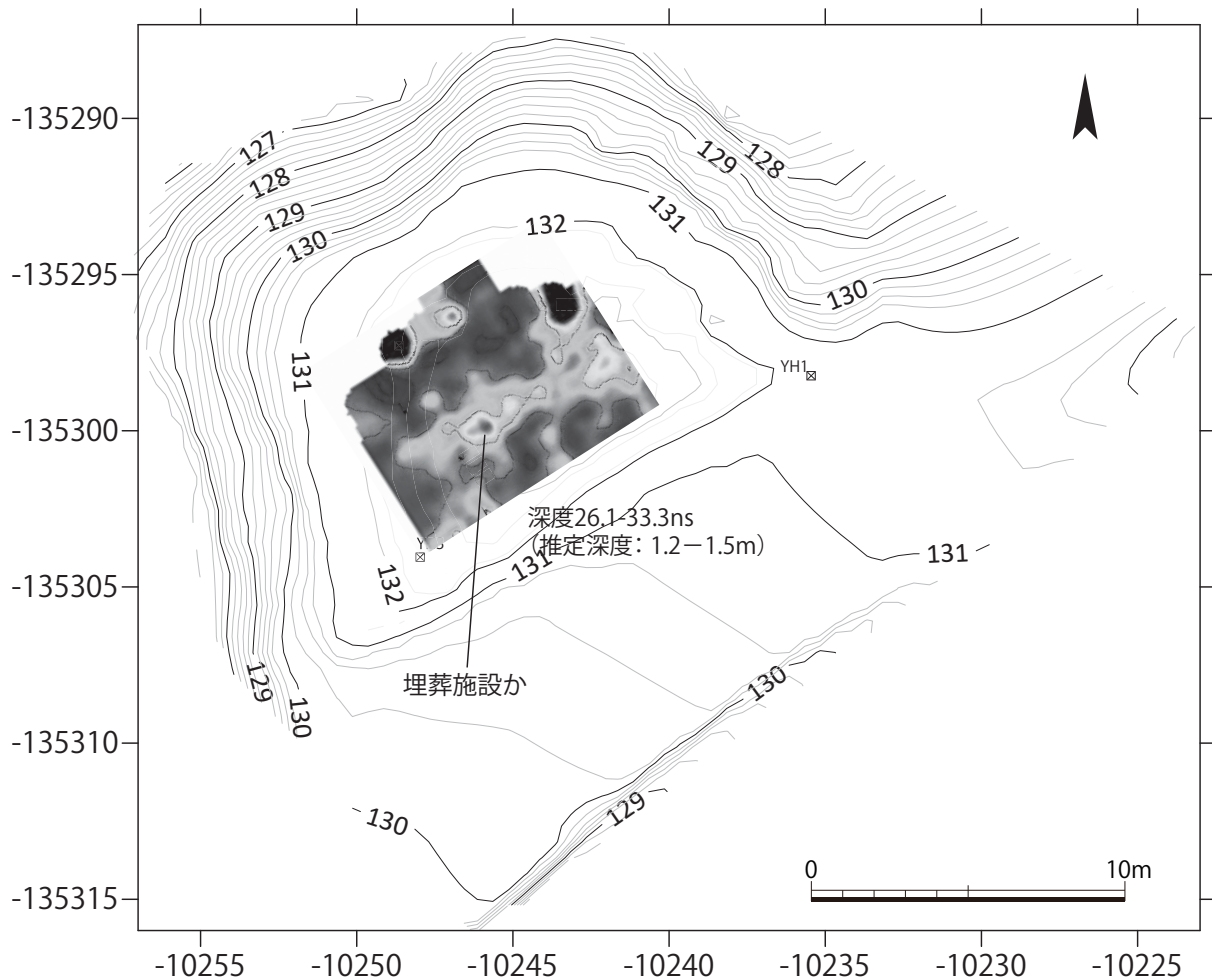


図2 湯谷ノ原古墳の地中レーダ探査結果

いましたが、今回の物理探査の成果から、埋葬施設とみられる反応があり、古墳である可能性も十分に考えられる結果が得られました。

福塚古墳の墳丘形態や湯谷ノ原古墳が古墳かどうかについて白黒を付けるためには、発掘調査をおこなう必要がありますが、今回の調査を通じて、遺跡を破壊することなくその実態を解明するための手段として、地形観察や測量に加えて物理探査をおこなうことの有効性が改めて確認できました。

なお今回の調査結果の詳細については、『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第10号に報告していますので、詳しくお知りになりたい方はそちらをご参照ください。また本稿作成にあたり、橋本英将氏、岸田徹氏には草稿に目を通していただき貴重なご意見をいただきました。記して感謝いたします。(菱田哲郎・諫早直人)

〔参考文献〕

京都府立大学文学部考古学研究室 2020 「和束町和東天満宮周辺の考古学調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号

京都府立大学文学部考古学研究室 2023 「和束町湯谷ノ原古墳の調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号

京都府立大学文学部考古学研究室・山の辺遺跡調査会 2024 「和束町湯谷ノ原古墳、福塚古墳の物理探査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第10号

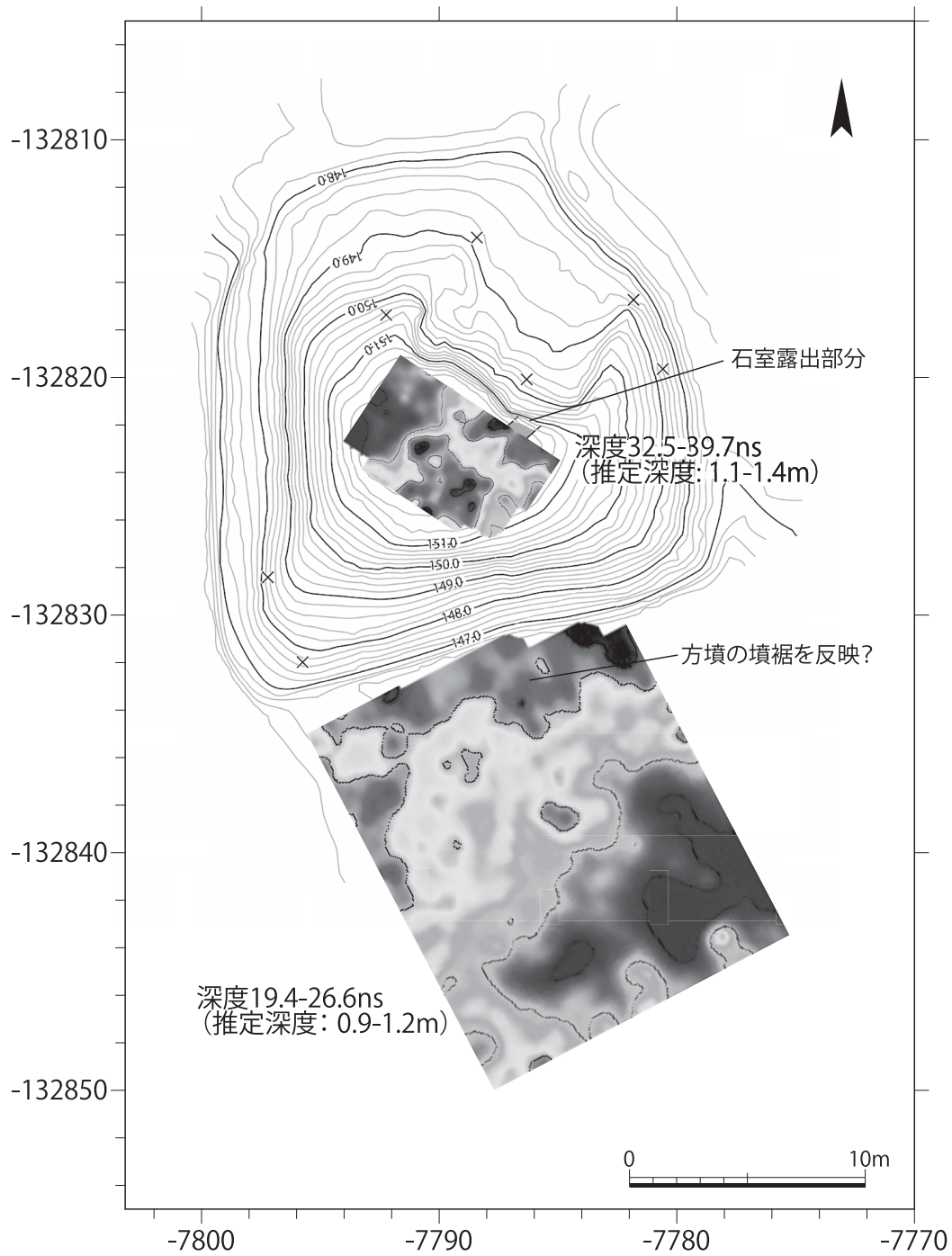


図3 福塚古墳の地中レーダ探査結果

鈴木康大・廣瀬覚・菱田哲郎 2021 「和東町福塚古墳の埋葬施設と埴輪」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号

物理探査学会（編）2005 「物理探査」『新版 物理探査用語辞典』愛智出版

〔図版出典〕

図1 京都府立大学文学部考古学研究室 2023 を一部改変

図2・3 京都府立大学文学部考古学研究室・山の辺遺跡調査会 2024 に一部加筆

写真1・2 京都府立大学文学部考古学研究室撮影

2 和東の歴史講座5 概要「和東の景観史～地域らしさを読み解く～」



講演中の上杉先生

【講演要旨】

私は、古文書や文献史料によって歴史を書くのではなく、地域を歩きまわることで見えてくるものによって書いてみたいと思っています。それを「景観史」と呼んでいます。

景観とは、明治になって、ドイツ語のラントシャフトの翻訳語として造られた言葉で、ラントは土地、シャフトはまとまりを示す接尾語です。土地のまとまりとは、目に見えるものだけでなく、見えない要素である地質や気象、氏子圏などを含む言葉です。景観＝地域性と言ってもいいでしょう。

景観史では、地域の見えかたがかわることによって、人々の営みがどうかわるかに関心があります。たとえば、茶園が開かれると、茶工場ができるだけでなく防霜ファンがついたり、新しく道ができたりします。まず地域を見渡し、和東らしさを形成するのはどういう要素か、目にはいる要素同士の関係性を見ていく。そうすることで、なにが大事か、活かしていきたい、残していきたいものが見えてきます。

和東にとって茶は大事です。しかし、茶だけではありません。

撰原の子安地蔵、白栖長井の弥勒磨崖仏、金胎寺の宝篋印塔と鎌倉時代後期の石造物がまとまってあります。和東盆地を囲む重要なポイントに、これらの石造物があります。

和東盆地ができたのは、和東谷断層が動いたからです。鷲峰山の側が隆起し南側が沈むという逆断層によって、屏風のような北側の山地と、南側のだらだらした盆地地形とができました。地質の違いも、茶の個性に影響します。鷲峰山トンネル工事にもなあって、和東谷断層の露頭が見られました。この断層は、約10万年動いていません。断層が動いたことによって盆地ができて、人々の営みが始まったのです。

道について考えてみましょう。恭仁京の東北道という有名な道があります。聖武天皇の時代に、和東盆地を通り恭仁京と紫香楽と結ぶルートとして開かれた道で、和東川の右岸

を通る道と考えるのが有力な説です。別に左岸にも古墳が点在するので、それらを結ぶ道もあったと思います。盆地は、通りやすいので、複数の道があったのでしょう。都を結ぶ交通の要衝が和東でした。和東川は、地質が固く、曲がりくねっていて、水運に不向きです。だから、木津川に物資を持って行くルートができる。つまり、木屋の浜ができます。木津川水運が利用できる木屋は、和東にとって大事な場所です。

自然を活かした産業に、砥石があります。『日本山海名産図会』（1799年）には、南、杣田、中、門前の砥石が紹介されています。

白栖では瓦製造が行われていました。昭和30年代、茶農家の景気がよくなり、瓦に葺き替えたそうで、瓦屋も農業兼業から瓦専業になったそうです。黒っぽくない、明るめのいぶし銀の瓦屋根で、和東の瓦だから統一性があります。「和東らしさ」でしょうか。

茶は、地質条件でみると、北側の山腹の茶園は高さがそろっています。和東谷断層があるからです。戦後、無理に開墾したところは、その後に放棄されました。また茶園の間に森林があり、一面の茶園に広がりません。鹿児島県などには、広い茶園がありますが、広がらないのが和東の茶園です。これも「和東らしさ」。

茶農家では、茶工場と茶園の距離が近いという特徴があります。摘んだ茶葉をすぐに加工でき、いい茶を作ることができます。また個人の茶工場が多く、決まった量を生産すればいいので、広い茶園は必要ありません。広い茶園景観があっても和東ではない。小規模茶園が分散してモザイク状になっていることが、和東茶のユニークさです。

このように、和東では、自然条件にうまく適合しながら、交通路ができたり、産業ができたりしてきました。

景観史では、過去の景観と現在の景観、さらに未来の景観の変化もみます。見慣れた景色でも、かわっていないようでかわっています。町営テレビが作成した1980年代の各地区の紹介番組に映る景色と、現在とを比較してみると、中学校の体育館が、かつては茶園だったこと、園・中地区では、露地茶園が覆下茶園にかわったことなどがわかりました。街歩きをすると、風景の中に歴史を読み解くことができます。

地域を語るときには、時代を限定しすぎるとおもしろくありません。暮しに直結する過去である断層も道も、現在につながっています。景観史は、時代を輪切りにしたり、一つの見方でみるのではなく、景観の要素から地域を見渡し、要素同士をつなげる作業をします。そうすることにより、要素が持つ「地域らしさ」＝「和東らしさ」に気づくことができると考えています。

*講演後、参加されていた堀前町長が、門前の砥石について、体験談を語られました。

3 和東の歴史講座6 概要「和東の古代」

第6回歴史講座は、令和6年（2024）1月27日に開催し、編集委員である京都府立大学の本庄総子准教授に「和東の古代」と題して講演いただきました。21名の参加がありました。

本庄先生は、奈良時代の文献史料を基に、恭仁京と紫香楽宮との関係性や、宮の造営における和東の杣山の重要性について話をされました。恭仁京東北道についての質問が複数あり、和東古代史への関心の高さが感じられました。



講演中の本庄先生

【講演要旨】

『続日本紀』天平14年（742）2月庚辰条に、「是の日、始めて恭仁京の東北の道を開き、近江の国甲賀郡に通ぜしむ。」という記事があります。この東北道については、いくつかの案がありますが、故足利健亮氏によって、奥畑⇒白栖⇒「安積親王墓」⇒中⇒原山⇒湯船を通る道が推定されています。この道は、和東川沿いの谷筋を避けつつ通過する道です。現在の木津信楽線から大きくは離れないと仮定すると、全行程30km強、高低差は少なく約300mで、実際に歩いてみると意外に歩きやすい道となっています。

和東という地名は、『万葉集』の大伴家持の詠んだ安積親王の挽歌に出てきます。『万葉集』巻3の475番歌と476番歌で、476番が

わご王 天知らさむと思はねば 凡にぞ見ける 和豆香杣山（わづか そまやま）
です。親王の墓が「和豆香杣山」に築かれたことを示唆しています。

他にも8世紀後葉には、「輪東」または「輪豆賀」という地名もみえており（『大日本古文书』6巻3頁、16巻285頁、19巻248頁）、「輪豆賀炭」と呼ばれる炭の産地だったようですが、「生馬輪東山」とも呼ばれているため、こちらは奈良の生駒の地名である可能性が高いと考えています。

古代の法令「格」の集成である『類聚三代格』の寛平8年（896）4月2日付太政官符所引の相楽郡司の解状（上申書）からは、南都の興福寺、大安寺などの材木を採る山＝杣山は泉川＝木津川の両岸に広がり、百姓は木津川に沿って山を開き、各地に群居する生活を100年以上前から続けていると主張されています。

また、『万葉集』巻11の2645番歌

宮材（みやき）引く 泉の杣に立つ民の 息（いこ）ふ時無く 恋ひわたるかも
では、泉の杣の民は、休むとき無く働いていることのたとえとして使われており、当時の木津川近辺の杣が宮城材木の供給地として活発に稼働していた様子が確認できます。

和東の古代にとって画期的な出来事が恭仁京遷都です。聖武天皇は、天平12年（740）2月に知識寺でみた仏像に感動し、大仏造立の意を固めたようです。直後に藤原広嗣の乱が

起きますが、乱の収束を待たずに東国を転々とし、同年12月に恭仁京の地に入ります。そして、天平13年から段階的に恭仁京への遷都を実行します。

恭仁と紫香楽を結ぶ東北道を開かれるのが天平14年(742)2月であり、これが紫香楽造宮の実質的スタートとみられます。同年8月、紫香楽離宮造営を始め、造離宮司は恭仁の造宮省長官・次官が兼務、つまり恭仁宮と紫香楽離宮は一体的に造営されます。

天平15年10月、紫香楽での大仏(盧舎那仏)造立開始を宣言する詔がだされます。翌日、東海道・東山道・北陸道の調庸は紫香楽宮に貢するよう指示がでます。つまり東日本の租税は紫香楽に、西日本のは恭仁に送り、恭仁と紫香楽で国家財源を二分するのです。その2つの宮を結ぶ大動脈にあたる地域が和東です。

天平15年(743)12月に恭仁宮造営は停止されます。予算逼迫し、紫香楽宮造営と同時並行は難しかったようです。天平16年2月には高御座を恭仁京から難波京へ移動しています。これは首都機能の一部移転ととらえられます。

天平16年(744)11月、大仏の体骨柱を立てますが、直後の天平17年正月、にわか「新京」＝紫香楽への遷都を決め、「山を伐り、地を開きて」宮室を作ります。すると同年4月、山火事が頻発します。放火か、無理な伐採による自然発火か、原因は分かりませんが、突然の紫香楽遷都は不穏な情勢を生み、結果、同年5月には平城京へ還都することとなり、大仏造立も奈良の東大寺に場所を移して実行されることとなります。

大仏造立にも、大量の木材が必要とされました。『続日本紀』天平15年10月辛巳条、大仏造立詔には、「国の銅を尽くして象を鎔、大山を削りて以て堂を構う」という一説があります。前半の「国中の銅を使いつくす」に即して解釈すれば、後半は削平ではなく「広大な山の木をも伐りつくす」の意でしょう。先ほど「山を伐る」という表現もありましたね。

平城京に還都後は、泉川は真木を積む、木材を積みだす場所と認識されています。『万葉集』巻13の3240番歌によると、「奈良山越えて」「真木積む泉の川」とあり、平城京の北方、泉川から奈良山を越えて運ぶのが、木材の供給ルートとして描写されています。

天平宝字元年(757)7月の橘奈良麻呂の変では、奈良麻呂の政治批判に「東大寺を作りて人民苦辛せしむ。氏々の人等も亦た是憂と為す。又剗(せき)を奈羅に置き、已に大憂たり」(『続日本紀』)とあります。前後の文脈から判断すると、「剗(関)」を置いたのは、東大寺造営に伴う事業で、東大寺の木材確保のための一定の統制機能を持っていたと推定できます。結果、貴族の邸宅など他の木材需要と軋轢を生むこともあったのでしょう。これは造営事業における木材確保が高度に政治的な問題であったことを示唆します。聖武天皇が造宮と造仏の場所を選ぶに際し、和東柚によって結ばれる恭仁・紫香楽に白羽の矢を立てたのも、こうした文脈の中に意義付ける必要があります。

4 チーム「炊いたん」の活動報告

1 経緯と概要

和東町史には「食文化」という項目も掲載されますが、令和5年（2023）度から本格的に調査が行われています。編さん室ではその一環として写真集『わづかの食文化の昔と今（仮称）』を計画し、「食」関係でボランティア経験等のある町民の皆さんに呼びかけたところ7人の賛同を得、チーム「炊いたん」として活動を始めました。以下にこれまでの取組を報告します。

7月4日に参加者に対して事業の概要を説明し、協議の結果、主な調理が「煮炊きもの」となることからチーム名を「炊いたん」と決定しました。調理する献立は『日本の食生活全集 26 聞き書 京都の食事』（日本の食生活全集京都編集委員会編、社団法人農山漁村文化協会発行、1985年）や聞き取りを参考とし、四季ごとに合計36品を選定しました。

調理は7月18日から3月7日まで和東中学校調理室を借りて合計で6回行われており、写真集のため料理の撮影もしています。

2 調理の内容

調理した献立は以下の表のとおりです。

年月日	献立
2023年7月18日	水無月団子、きゅうりの酢の物、三度豆のおひたし
8月24日	ナスとにんじんの炊いたん、ぼた餅、南瓜の炊いたん
10月19日	巻き寿司、さつまいものつるの炊いたん、里芋の煮物
11月30日	かやくご飯、ふかしいも、なます（紅白）、さつまいもの炊いたん
2024年1月25日	アカエイの煮付け、茶がゆ（おかいさん）、芋がゆ（さつまいも）、小豆がゆ、頭イモ、大根と厚揚げの炊いたん、にんじんの炊いたん
3月7日	よもぎ餅、焼き団子、ねこ団子

献立選定の参考にした『日本の食生活全集 26 聞き書 京都の食事』は、大正の終わりから昭和の初めころの和東町（園地区）の食生活を聞き書き、再現したものです。現在の和東町ではどうなのか、今後、若い人達に伝わるのか、色んな思いの中で取り組んでいます。現在、36品中25品が調理・撮影済みで、残り11品となりました。

チームは、今、七転八倒・右往左往、でも楽しく調理しています。写真集の完成をご期待ください。

○チーム「炊いたん」のメンバー（順不同・敬称略）

竹内きみ代（代表） 藤木優理香 小西享子

西中理都子 中川桂子 田中昇太郎 田中美代子

※以上の方々は、和東町史編さん協力員としても登録していただいています。



水無月団子（2023年7月18日調理）



巻き寿司（2023年10月19日調理）



アカエイの煮付け（2024年1月25日調理）

5 あそび塾ウォークラリー報告



写真1 和東小学校でPRを行う大学院生・学生（写真中央がハニワマスター）

令和5年（2023）11月11日、和東町の小学生向けに行われているあそび塾と和東町史編さん室のコラボ企画という形で「あそび塾ウォークラリー」が開催されました。

編さん室は令和3年（2021）1月にもあそび塾とのコラボ企画として坂尻古墳の現地説明会を行っており、その際には京都府立大学の学生にも協力してもらっていたことから、今回のウォークラリーでも京都府立大学へ協力を依頼しました。

京都府立大学は他地域でも地域学習への協力を行っていることから、学生の参加が難しいのではないかという予測もありましたが、3人の大学院生・学生が企画段階から参加し、イベント当日には合計で7人の大学院生・学生が協力してくれました。

3人の大学院生・学生は10月23日にイベントPRのため和東小学校を訪問し、その際には1人がハニワマスターとなって小学生達の興味をひいていました（写真1）。

このPRのおかげもあってか、イベント当日には小学生13人、保護者6人の計19人の参加者が集まってくれました。

ウォークラリーは太鼓山古墳（伝安積親王墓）からスタートし、そこで大学院生・学生による古墳に関する簡単なクイズと説明が行われました。古墳を観察した後、和東天満宮へ歩いて向かい、その途中の観光案内所近くで、休憩を兼ねて釜塚の茶畑を眺めながら和東のお茶に関する簡単なクイズと説明が行われました。



写真2 福塚古墳で埴輪のレプリカに触れる参加者の小学生達

天満宮に到着後は、天満宮西隣の福塚古墳で古墳の説明が行われ、次に天満宮境内で天満宮の歴史に関する簡単なクイズと説明が行われました。

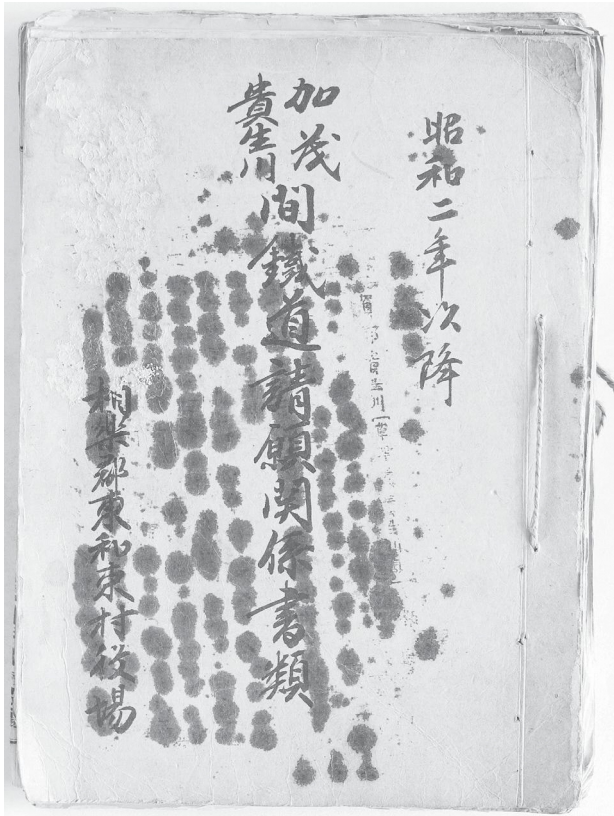
福塚古墳の説明では、実際に福塚古墳で見つかった埴輪のかけらの実物と埴輪のレプリカを参加者に触れてもらうことが行われ、イベント中一番の盛り上がりを見せていました(写真2)。

イベントは大きなトラブルや怪我もなく予定時間通りに終了し、「和東の歴史が知れてよかった」という参加者の小学生の感想もあるなど、子ども達の和東町の歴史に対する関心を高められるイベントとなったようです。

なお、大学院生・学生の1人は11月とはいえ、まだ暖かさの残る中、終始、ハニワマスターの姿で汗をかいていてくれたことをここに記しておきます。

最後に、突然の依頼だったにも関わらず、忙しい中、イベントに協力してくれた大学院生・大学生の7人の皆さんに改めて心より感謝申し上げます。

6 町史編さん室史料紹介 幻の鉄道計画



加茂貴生川間鉄道請願関係書類

昨年の令和5年（2023）は関東大震災から100年の年でした。関東大震災は和東に直接的には関係のない出来事でしたが、間接的には影響がありました。それが幻となった鉄道計画です。

鉄道計画については戦前の東和東村役場の史料が和東町役場に残されていたことから経過が詳しく分かりますので、それを紹介していきます。

大正12年（1923）帝国議会で滋賀県貴生川駅から京都府加茂駅までの鉄道工事を大正13年（1924）度から始めることが決まりました。和東はこの鉄道の路線上にあり、実現していれば和東の中を鉄道が通っていたはずでした。しかし、議会で決まった年の大正12年9月1日に関東大震災が発生します。首都を襲った大震災の結果、鉄道建設予算は

削減されます。そのため、鉄道計画は存在するものの工事は実施されないまま4年が経過します。

その4年後の昭和2年（1927）に動きがあります。それは立憲政友会の田中義一内閣成立でした。もともと政友会は鉄道建設に積極的な政党であり、首相の田中も交通機関の整備を政策として掲げていました。これを好機と見たのか、当時の西和東村・中和東村・東和東村・湯船村4ヶ村の村長達は連名で内閣に対して鉄道建設工事を早く進めてほしいという請願書を出しています。請願書が功を奏したのか、昭和4年（1929）には加茂駅から東和東村まで工事準備のための測量が行われたようです。また、同年5月16日から滋賀県側の貴生川・信楽間で工事が始まっています。

4年後の昭和8年（1933）5月8日、貴生川・信楽間の鉄道が開業します（現在の信楽高原鐵道信楽線）。しかし、京都府側の加茂駅とつなげる工事が始まることはありませんでした。同年、信楽駅・加茂駅間は鉄道ではなく省営バスを走らせることが決定し、バスは7年後の昭和15年（1940）11月に近城線として開業します。現在は運営主も行き先も経路も変わっていますが、この近城線が以後の和東のバス路線の原型となります。

鉄道計画は2度チャンスがありましたがいずれも阻まれ幻となりました。1度目は関東大震災という自然の起こした天災によって阻まれました。では、2度目はなぜ実現しなかったのでしょうか。それは当時の日本が段々と戦時体制に向かっていき、不要不急とみなさ

れた鉄道に予算や物資が使われなくなったからだと考えられます（貴生川駅・信楽駅間の鉄道も不要不急として戦争中の昭和18年10月1日から戦後の昭和22年7月25日まで休止しています）。和東を通過していたであろう鉄道は人間の起こした災厄である戦争によっても阻まれたのです。

年代	内閣	内閣の構成	和東の出来事	日本の出来事
大正5年 (1916)	寺内正毅	陸軍大将・貴族院	私営バスが初めて走る。鉄道建設を陳情し始める	
大正7年 (1918)	原敬	立憲政友会		鉄道院が鉄道省に格上げになる
大正11年 (1922)	高橋是清	立憲政友会		改正鉄道法公布。膨大な予定路線が盛り込まれる
大正12年 (1923)	加藤友三郎	海軍大将・立憲政友会	大正11年年末からの第46回帝国議会で貴生川駅から加茂駅までが建設線となる	
				9月1日関東大震災
大正13年 (1924)	山本権兵衛	海軍大将・貴族院		
	～6月11日 清浦圭吾	非政党内閣		
大正13年 (1924)	6月11日～ 加藤高明	憲政会・立憲政友会・革新倶楽部→憲政会単独	加茂・湯船間民営バス開通	
	～4月20日 若槻礼次郎	憲政会	3月21日～31日まで中和東村長西井行次郎が東京に請願に向かう	
昭和2年 (1927)	昭和2年4月20日～昭和4年7月2日 田中義一	立憲政友会	8月西和東・中和東・東和東・湯船村長が請願書提出	
	7月2日～ 浜口雄幸	立憲民政党	工事準備のための測量が加茂から東和東村まで行われた模様	5月16日から貴生川・信楽間の工事着工
昭和4年 (1929)	若槻礼次郎	立憲民政党		
	昭和7年 (1932)	犬養毅	1月22日～27日まで東和東村長奥甚兵衛・湯船村長宗正一が東京に請願に向かう	
			五・一五事件犬養首相暗殺	
昭和8年 (1933)	斎藤実	挙国一致内閣	5月8日貴生川・信楽間の鉄道開業。信楽・加茂間は予定線になり省営バスを走らせる計画となる。10月西和東・中和東・東和東・湯船・瓶原村長と加茂町長がバスの請願書提出	
昭和15年 (1940)	岡田啓介→ 廣田弘毅→ 林銑十郎→ 近衛文麿→ 平沼騏一郎→ 阿部信行→ 米内光政	挙国一致内閣		
昭和15年 (1940)	近衛文麿	挙国一致内閣	11月5日省営バス近城線開業	

7 町史編さん室から 令和5年度の事業

(1) 全体構想が決まりました。

和東町史全2巻の内容や体裁について、大枠が決まりました。

第1巻が通史となり、考古、古代、中世、近世、近現代の構成です。第2巻が分野別となり、自然環境・地理景観、建築、宗教美術、祭礼と食文化、茶業史となります。2巻とも、A4判約300ページ、オールカラーで、令和8年度中の刊行予定です。

(2) 食文化調査を始めました。

和東に残る伝統食やハレの食事について、記録し次世代に引き継いでいくために、食文化についての調査を始めました。詳細は、「4 チーム「炊いたん」の活動報告」を参照ください。

(3) 祭礼調査を始めました。

和東町の各区に残る伝統的な行事の調査を始めました。今年度は、白栖の勧請縄行事、園の観音寺の大根炊きを調査しました。調査は、上杉編集委員にお願いしています。

(4) 古文書の整理等の状況について。

町史編さん室では、和東町議会の議事録の内、和東小学校統合に関する部分を調査しました。このところ、古文書整理点数が少なくなっております。まだ編さんに間に合います。古文書をお持ちの方は、ぜひご連絡ください。

(5) 町史編さんだよりの掲載について。

令和4年7月から、「広報れんけい」に、「和東町史編さんだよりの」を連載して、調査等で明らかになったことをお知らせしています。本年度掲載の内容は、次のとおりです。なお、ホームページにも掲載しています。

- | | | | |
|------|--------------------|------|-------------|
| 第10回 | 小学校のうつりかわり | 第11回 | 町営結婚式 |
| 第12回 | 江戸時代の和東川水害 | 第13回 | 和東天満宮の鐘 |
| 第14回 | 南山城水害から70年 | 第15回 | 幻の鉄道 |
| 第16回 | 水害の記録 | 第17回 | 福塚古墳 |
| 第18回 | 江戸時代の和東でも海の魚を食べていた | | |
| 第19回 | 和東と江戸のお茶取引 | 第20回 | 「祝橋」の由来を考える |
| 第21回 | 和東の古墳出土品 | | |

(6) 編集委員等による悉皆調査。

小林委員長による聞取り調査（戦時・戦後の和東）、藤井委員による聞取り調査（和東の産業）、上杉委員による景観調査・祭礼調査、岸委員による建造物調査、井上委員・國賀執筆者による仏像・絵画調査などが行われました。

資料調査報告書 第4号

発行日 令和6年(2024)3月29日

編集 相楽東部広域連合教育委員会
生涯学習課和東町史編さん室

TEL 0774-74-8952 FAX 0774-74-8953

発行 相楽東部広域連合教育委員会
〒619-1205

京都府相楽郡和東町大字中小字平田23-1

TEL 0774-78-4335 FAX 0774-78-4338

ホームページ <https://www.union.sourakutoubu.lg.jp>

印刷 株式会社 昭文社

